

真鶴半島の自然と史跡めぐり 荒井城址公園



波濤34号の企画日より「健康と景勝を求めて真鶴半島の自然と史跡めぐりをしませんか」に誘われて参加してみました。快晴の真鶴駅に下りると、幹事の鯉沼さんが私達を迎えて待っている。駅周辺を一回りすると頼朝の旗揚げの大鍋があり、そのいわれも立て板に書いてある。10時に全員揃ったので6人の小さな旅が始まった。駅前の国道を横断し、ゆるい坂を5分も登れば荒井城址公園だ。桜木も多い、竹林の径も美しい。ピクニック広場、砦のアスレックス、竹の庭もある。広場では子どもたちが飛び回っている。カップルも楽しそうに歩いている。やわらかい日差しを浴びた城址公園を出ると相模湾が目に飛び込んできた。ここから真鶴半島の真ん中をウォーキングし町立中川一政美術館へ向かった。この道は人の往来が少ない。自動車も走ってこない。マイカーもバスもトラックも海岸沿い道路を走るのだ。

二 十 一 日 (日)	平成十九年十月	10:00	11:00	12:00
		真鶴駅集合 荒井城址公園	中川一政美術館	森林浴遊歩道 琴浜にて昼食
		13:00	14:00	15:00
		貴船神社	魚市場	真鶴駅 有志で懇親会





向日葵 1982年



薔薇 1986



少年像 1967年



1	人	1	石
9	生	9	田
3	劇	3	三
9	場	8	成
年		年	

真鶴町立 中川一政美術館



真鶴町立中川一政美術館に入ってみた。ここは1998(平成10)年には建設省の公共建築百選を受賞している。日曜なのに入館者は意外に少なくとても静かだ。丁度平成19年9月20日ー11月20日まで特集を開いていた。中川一政が描いた「石田三成」(尾崎士郎著)の挿画原画、「人生劇場風雲編」(尾崎士郎著)の挿画原画が多数展示されていた。

バラとひまわりなど静物画ばかりのコーナーがある。花瓶はマジリカ壺が多く、この壺を愛用していたという。収集品を展示した所にもマジリカ壺が展示してあり、壺は南国風、陽気で暖かみがある、と説明が書かれていた。ひまわりの作品も多い。ゴッホ(Vincent van Gogh)のひまわりを美術館で見たことはないが、いま目の前にある中川画伯のひまわりは力強い印象を感じた。



森林浴遊歩道から真鶴岬と三ツ石へ



中川一政美術館の少し先に森林浴遊歩道の案内板が出ている。ここから原生林に入った。樹木が多く薄暗いが、道はよく整備されて歩きやすい。途中にかながわの名木100選の案内が出ているほど真鶴半島にはクロマツの大木が聳え



立っている。とくに樹齢350年 45メートル 胸高で5.6メートルの巨木は圧倒的な迫力で私達を見下ろしている。

奥へ奥へと入っていくと円卓状の大きな道案内が置いてあった。上から見ると←三ツ石 灯明山↓ 美術館→と刻んである。三ツ石の矢印に沿っていくと、番場浦遊歩道から下り道に入った。樹林の合間から青い海原が見え隠れし快適な遊歩道だ。枯れ枝落下注意が出るほど枯れ枝に足をとられないように下っていくとバスの終点の発着所に出た。 ケープ真鶴(町立?) が真鶴観光の基地だ。



遊歩道ではほとんど人に会わないのに、ここは観光客で賑わっている。土産屋とレストランがあるし会議室まであるという。この奥から三ツ石までおける遊歩道がある。数十メートルの高さの道の急階段を下りていくと海岸に着く。空も青く海も青い。三ツ石は目の前にある。潮が引いているときは歩いて行ける距離だ。お腹も空いてきた。時計を見ると12時半になっている。注連縄を張ってある笠島(三ツ石の正式名)を見ながらここで昼食にした。



三ツ石 琴ヶ浜 そして真鶴まつり

古くは笠島

と呼ばれていた三ツ石の目の前に立ってみると水平線の彼方から現れる太陽に真鶴の自然の景観の美しさに文人も私達も魅入られてしまうのだ。坪内逍遙は昭和初期に訪れて「初日の出 なぜ三ツ石に 注連はらぬ」と詠んだ。与謝野晶子や内閣総理大臣を務めた片山哲も詩歌を残した。

帰り道には国文学者で歌人である佐々木信綱の歌碑に立ち寄った。「真鶴の林しずかに 海の色さやけき見つつ わが心清し」と詠んでいる。ここは琴ヶ浜へ下る坂道の途中に歌碑立っている。ふと振り返ると二人の足音が待てども中々聞こえてこない。二俣に分岐するところではぐれたのだろうと思案している時に携帯音が鳴った。朝歩いた道にいたので真鶴駅で逢う事にした。

S字状の道を下ると琴ヶ浜が現れた。琴ヶ浜沿いの道は真鶴岬へ行くメイン道路なので磯料理のお店や干物店も多い。マイカーやバスの往来が多いので堤防の上を歩くことにした。堤防の外側の海岸沿いの遊歩道もある。後で気がついたがこの付近に貴船神社があるのだ。

潮風に乗って民謡の三味の音がどこからか聞こえてくる。魚市場の魚座の近くになると太鼓の音や焼いかの臭いも漂ってきた。今日は真鶴漁港で真鶴まつりが開催されていたのだ。地元の名産品や焼き鳥や焼いかもビールも飛ぶように売っていた。漁船をバックにこどもたちが太鼓を叩いていた。初めてみる港町のお祭りが同窓会のイベントに華を添えてくれたのだ。もうすぐ真鶴駅。駅前の小さなお魚の居酒屋で会長の笠井さんも馳せ参じ神奈川同窓会の真鶴半島の自然と史跡めぐりの完歩を祝した。

番外編 真鶴半島の自然と史跡めぐり 竹の筆



ネット

ケーブル真鶴から三ツ石への急な階段を下ると見晴らしの良い所に出た。ここに竹の筆の書道展の看板が大きく出ていた。書道展といっても書を見るのは主たる目的ではない。数年前ここに立ち寄って竹の筆を買ったのを覚えているからだ。竹の筆は写真のように楕円状(2cm x1.5cm)の太さ 測ってみたら25cmある。先端は鉛筆のように削ってあり意外と手になじみ持ちやすい。年賀状の宛名書きなどに使う時に、硯の墨をつけていたが、そうではないのだ。



お店ではたっぷり墨が入っている大きな墨壺を使っているが、普通の家庭では壺など持っていない。「蜜柑の空き缶や広口の深い壺が一番です」と話してくれた。大きな字を書くときは寝かすと独特な掠れが出るし、立てると小さな字も書ける優れものだ。

竹の筆は竹の根を加工したもので、相当長い間使っても、摩耗せず、竹の節で、墨汁の流れ落ちがなく、墨持ちが良い。



人物字典やパンフによると

竹の筆は望月秋羅(1920年～)が60歳のころ短歌の会で行った千葉県の中中に、絡み付くようにあった変形の竹の根を持ち帰り、大工仕事に使う墨壺をヒントに根を焼いて油を抜いた竹の筆で、竹峰流を立ち上げ、筆による書から竹を用いた書の世界を開いたという。お店の入り口の看板にはイオンド大学名誉教授、オーストリア宮廷芸術会員など大きく出ていた。